



石戸コレクションの絵葉書

**第58回テーマ：
絵はがきで見る六甲山**

講演内容

- 昔の絵葉書に見る神戸の景観
- 六甲山・有馬と絵葉書の歴史
- ノスタルジーから未来へ
- ・・絵葉書から何を学ぶか・・

実施日：平成20年1月19日（土）
午後1時～3時30分
場 所：六甲山YMCA里見ホール



講師：石戸 信也さん
プロフィール

1958年神戸市生まれ。同志社大学文学部卒業。博物館・美術館学芸員資格習得。各地の県立高校で歴史を担当し、県立人と自然の博物館などを経て、現在、県立兵庫工業高校・教諭。専門は文化史・日欧文化交流史。

自然歩道は雪化粧

1月に入り、冬も本番。六甲山にも雪が降る季節になりました。この日は、日陰はうっすらと雪化粧していました。散策路脇の二つ池は凍結し、幻想的な光景でした。午前中の景観整備活動では先月に続いて植生調査の区画設定をしました。気温は0度前後という寒さでしたが、参加した12名には心地よい涼しさ。汗をかきながら作業しました。



二つ池は幻想的な雰囲気

石戸さんは日本有数の絵葉書研究家

講師の石戸さんは神戸ご出身です。震災以降、神戸の懐かしい風景が変わっていくのを目にされました。かつての姿を「誰も知らない昔の話」にしないため、絵葉書の研究を始められたそうです。今ではコレクションは4000枚に及び、「石戸コレクション」として各所で紹介されています。セミナーでは神戸市民が一気に六甲山に登り始めた、昭和初期に焦点を当てていただきました。

昭和初期、市民が六甲山に熱中した

講演では絵葉書の歴史や、市民と六甲山の関わりの歴史を多数のスライドをもとにお話いただきました。六甲山と市民の関係は、昭和初期の10数年の間で一気に深まり、戦争とともに一気に薄くなっていった。昭和初期は市民と六甲山の関わりを考える上で重要な時期で、今後の六甲山のあり方を考える上でも参考になる、と解説されました。

「六甲山のアイデンティティ」を位置づけたい

多数の貴重な絵葉書を石戸さんにご紹介いただきました。紹介にとどまらず、六甲山や山麓を考える示唆に富んだお話でした。石戸さんの「神戸のアイデンティティを大切にすべき」というお考えは、私たちにとっては「六甲山のアイデンティティ」に繋がるお話でした。六甲山をどう位置づけていくのか、これからの重要な課題を提起していただきました。

※詳しくは、1. 2ページをお読みください。

参加の感想 小立 薫さん

二つ池の調査に参加。駐車場から程近く、踏み跡のない白い雪の下の池を見て驚いた。下界では見ない霜柱が輝いて美しく、粉雪中、小さいきのこが一つ。凍てつく寒い池にすむ昆虫など、二つ池の講座に参加して以来興味を持っていたが、小さな池とその周りの自然に魅せられた。絵葉書についての講演は、その時代にいなかった私が何故か懐かしく感じる風景で、神戸の歴史と自然を大切にしていきたいと感じた。

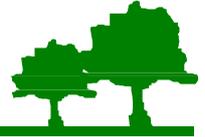


主催：六甲山自然保護センターを活用する会
協力：兵庫県立人と自然の博物館
後援：兵庫県神戸県民局 灘区役所 神戸市教育委員会

【助成金をいただいている機関】
コベルコ環境保全基金、セブン-イレブンみどりの基金
ひょうご環境保全創造活動、コープこうべ環境基金
しみん基金・こうべ



第58回テーマ：絵はがきで見る六甲山



第58回市民セミナーの流れ

市民セミナー

1. あいさつ：13:00～13:10
2. 講演：13:10～14:40
3. 休憩：14:40～14:50
4. 講演：14:50～15:25
5. 質疑応答：15:25～15:30

講演

- 昔の絵葉書に見る神戸の景観
- 六甲山・有馬と絵葉書の歴史
- ノスタルジーから未来へ
- …絵葉書から何を学ぶか…



神戸コレクションから

講演の挨拶(石戸信也さん)

絵葉書を切り口に、神戸市民が六甲山にどんどん登ってきた昭和7年から11年頃に焦点を当てながらお話します。その頃の六甲山と市民との関わりが、六甲山の将来を考える上で何か参考になればと思います。



石戸さん

講演内容

1. 絵葉書は時代を証言する

■失われていく神戸の記憶

阪神淡路大震災から13年経った。震災後に生まれたか、転入してきた人が神戸市民の3人に1人になった。震災を知らない人が増え、体験を風化しないように考えなければならない時期に来ている。

神戸は昭和13年の阪神大水害、昭和20年の戦災、戦後の都市開発で姿を変えてきた。さらに震災に遭い、街の風景は一変した。神戸らしい懐かしい景観がたくさん失われた。震災前、戦争前の神戸を伝える資料さえ少ないのが現状。

■絵葉書の研究対象としてのタイムリミットは近い

絵葉書は絵画でいうと、1号という小さな世界。その中に、色々な時代の情報が残されている。絵葉書は安く手に入ったが、逆に残りにくい。絵葉書自体の数が減っているのが、研究対象にするには収集のタイムリミットが近い。

同時代の証言をできる人もどんどん減っている。私の祖母は94歳。昨日・一昨日のことは覚えていないのに、昭和初期の新開地のどの店で何がいくらで売っていたかは覚えている。今、真剣にやらないと、どんどん誰も知らない昔の話になっていくんじゃないかという危機感がある。

■市民にとって普通の山だった六甲山

私は生まれも育ちも神戸で、子供の頃から六甲山に登った。六甲山は特別な山ではなかった。市民にとって六甲山はどのような存在だったのだろうか。

戦前の神戸の学校は運動会や改築記念で絵葉書を出した。市章山や錨山、菊水など、神戸を象徴するデザインを取り入れた。だが六甲山を描いた絵葉書はなかなか見つからない。あまりに普通すぎて、絵葉書のデザインにならなかったのだろうか。一方で、学校の校歌には「ろっこう」や「むこのやま」など、六甲山系の名前が多く出てくる。

2. 絵葉書学入門

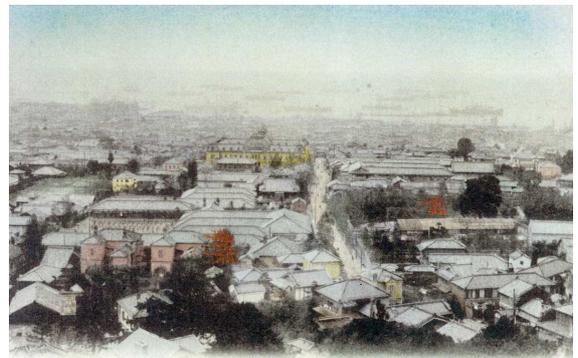
■絵葉書は近代を象徴する

今は携帯電話で写真を撮れる。写真の重みがなくなった。昔は旅先から自分の見た風景や感動を伝えたいと思うと、いちばんいい絵葉書をえらんで送った。絵葉書は自分の感じたことを相手と共有するツールだった。

絵葉書は写真技術と郵便制度が発達しないと成立しない、近代を象徴するものでもある。

■絵葉書のはじまり

江戸時代の終わりに日本に写真が入ってきたが、写真は大変高価なものだった。その後、コンパクトで安い絵葉書が生まれた。明治33年頃から私製はがきが認められ始めて、日露戦争頃には絵葉書がブームになり、大量につくられた。絵葉書は旅行の土産としてだけではなく、記念品としてや、宣伝や政府のプロパガンダにも使われた。



諏訪山から見た神戸市街。手彩色(明治末～大正初期)



六甲山頂一軒茶屋(昭和初期)

3. 昔の絵葉書に見る神戸の景観

■六甲山が一気に身近になった昭和初期

神戸では大正14年に摩耶ケーブルができ、昭和4年には表六甲ドライブウェイや六甲山ホテルができた。神戸の人口がどんどん増えて、市民は六甲山を意識し始めた。昭和8年頃は神戸が海と山に囲まれた街というアイデンティティができてきた年だと思う。第1回みなとの祭りが始まり、近づいていく戦争を忘れるかのよう、華やかさに酔いしれた。

満州事変後の昭和11年、神戸沖の観艦式では、軍は六甲山から海を見ないよう180ヶ所に立て札を立てた。昭和11年は自由に六甲山を楽しめた最後ではないか。昭和7年から11年は六甲山にとって重要な時期だった。(昭和11年は開港以来最多の出入港船舶数となり、14年には人口100万人を突破して「大神戸」となった。)



六甲開祖の碑 (昭和初期)

■「神戸八景」に市民が沸いた

戦前に神戸新聞と肩を並べる新聞社「神戸又新(ゆうしん)日報」があった。神戸又新日報が昭和7年に「新神戸八景」の投票を市民によびかけた。山水・海浜や展望の良いところ、住宅街、繁華街など8種類の名所を決めた。投票状況を毎日朝刊で公開し、投票総数は約41万票にもなった。「展望」では当初、三越の屋上が

1位だったが最終的には1位摩耶山、2位六甲ケーブルになった。「住宅地」は灘区の伯母野山が選ばれ、今でも石碑が残っている。

まとめ(石戸さん)

六甲山は神戸市民にとって身近な存在になり、歌に歌われ、絵はがきに描かれるようになりしました。昭和初期、六甲ケーブルやロープウェイ、ドライブウェイの開通によってそれが一気に加速しました。六甲ケーブル完成と同じ年、神戸又新日報に次のようなコラムが出ています。

「神戸は大きな施設をつかって開発していくのではなく、神戸が本来持っている神戸らしい特徴を生かして大阪にも東京にもないものをつくるべき。神戸のアイデンティティを大事にしていこう」と、76年前にすでに訴えかけています。

神戸がミニ東京になってしまっただけとはいけないと思います。震災以降自分のふるさとが変わっていくのを見て、原風景が失われることに危機感を持っています。歴史遺産を大切にしていこう「都市のデザイン」が必要です。

参加の感想 安井 裕二郎さん

今回初めて参加させていただきました。六甲山で六甲山の絵葉書を見る。これはもっともふさわしい企画であったと、これ以上良いタイミングはないと思います。講師の石戸氏の熱意を感じ、通常は何か欲求不満のまま会場を後にする私ですが、今回ばかりはスッキリしました。ありがとうございました。



事務局より

「神戸のアイデンティティを大事に」「自然にあるものを生かしていく」ということは素晴らしいご提案だと思いました。六甲山のアイデンティティをどう位置づけていくのかがこれからの私たちの課題になると思います。

◆参考・配布資料など

- ・レジュメ、スライド
- ・絵葉書(石戸コレクション)
- ・『神戸のハイカラ建築・むかしの絵葉書から』(石戸信也著、神戸新聞総合出版センター、2003年)



兵庫県立兵庫工業高校教諭

石戸 信也 いしど のぶや

〒652-0863 神戸市兵庫区和田宮通 2-1-63

TEL: 078-671-1431 FAX: 078-671-1435

◆参加者の声～アンケートより～

- ・絵葉書に歴史があるなんて思いもよらなかった。
- ・先生は話上手で分かりやすかった。また話が聞きたい。
- ・神戸・六甲の発展の歴史がよくイメージできた。

◆参加者: 29名(50音順・敬称略)

浅井 慎一	池田 螢俊	石戸 信也	泉 美代子
井上 靖夫	今西 淳二	兼定 力	久門田 充
香西 直樹	小立 薫	高田 英裕	高山 歩
田中 有司	豊田 實	堂馬 英二	堂馬 佑太
野口 裕美	橋本いくる	長谷川友彦	伴 芙美香
廣岡 倭	藤井宏一郎	村上 定広	八木 浄
安井裕二郎	山下 清志	山下 朋子	山下 昌人
米村 邦稔			